



一 おしっこ王子

朝、僕は目覚めると、ふとんを跳ね除け、慌ててトイレに駆け込んだ。おしっこがもれそうだったからだ。トイレはベッドから十五歩。待って、待って、と、パジャマの上からおちんちんをなだめすかし、小走りで駆けて五秒。ドアを開け、便器の前に立って一秒。慌ててズボンと一緒にパンツをおろし、おちんちんを取り出す。

今だ。僕の号令よりも早く、おちんちんの先から、勢いよく水しぶきが飛び出す。まるで、便器の中が火事で、火を消すほどの勢いだ。ふっ。ため息。あやうく、パンツやパジャマのズボンを濡らすところだった。だけど、おしっこの勢いが強すぎて、水しぶきが跳ね上がる。

噴水だ。後ろに下がれば、おしっこの放物線が便器からずれてしまう。爪先を立て、高く背伸びして、おしっこの跳ね返しから逃れる。おしっこは、自分の体の中から出てきたものだけど、やっぱり、ばっちい。やっぱり、汚い。最後のひとしずくがポトリと落ちると、僕の頭とおちんちんも安心したのか、一緒にうなだれた。

僕は、膝まで下りたパンツとズボンをひき上げ、便器にたまったおしっこを流そうとした。その瞬間、「待って」、という声が出た。辺りを見回す。狭いトイレの中。誰もいない。外で、お父さんやお母さんが待っているのかなと思いきや、ドアを少し開ける。立っている姿はない。格子窓を開ける。ここは、二階だ。誰だって覗けないはずだ。

まさか、泥棒？でも、泥棒が、住んでいる人に声を掛けるはずはない。カラスやハトがおしゃべりするわけでもない。気のせいだと思い、再び、水洗レバーを回そうとした。

「ここだよ、ここ」

声が出たのは、便器の中だった。中を覗く。たまり水の中から、じゃじゃじゃーんという音とともに、水柱が上昇し、人間の姿になった。ひゃあひゃあひゃあーん。僕は相手に負けないくらい大ききで、驚きの声を上げた。

「びっくりしなくてもいいよ。僕は、君のおしっこさ」

びっくりしなくてもいいと言われて、びっくりしない奴なんていない。でも、びっくりするだけでは、話が前に進まない。勇気を奮うほどではないけれど、僕は、その水の妖精、それとも妖怪に向かって話し掛けた。

「僕のおしっこだって？」

「そう、君のおしっこさ。さっきまで、君の体の中にいたじゃないか」

「そうだね」

証拠はないものの、僕は黄色い液体の妖精の言うことを無理やり信用した。

「それで、僕のおしっこの君が僕に何のようだい」

「ははははは。おしっこの君だなんて言い方はやめてくれよ。僕にはちゃんと名前がある。君にハヤテという名前があるように」

確かに僕のおしっこだ。僕の名前を知っている。でも、おしっこに名前を呼ばれたのは生まれて初めてだ。お父さんやお母さんも、自分のおしっこ便所の中でおしゃべりをしているのだろうか？そう言えば、お父さんはトイレの中でよく鼻歌を歌っている。それは、僕には鼻歌に聞こえるけれど、本当は自分のおしっこ会話を楽しんでいるのかもしれない。だから、いつも上機嫌なのか。妙に納得。妙に安心。

「じゃあ、何て呼べばいいの？」

便器に向かって声を掛ける。でも、自分のおしっこ話すなんて変な気分だ。

「おしっこ王子さ」

「おしっこ王子？」

「そう、人は、僕のことをおしっこ王子と呼んでいる」

人って「どこの誰なの」と、思わず王子に突っ込みそうになったけれどやめた。それに、小さな子どもじゃないんだから、自分で自分のことを「王子」と呼ぶなんて、可笑しい。

「それで、その王子様が、僕に何の用だい」

「君と僕の仲だ。敬称は不要だ。「様」は省略してもいいよ。王子だけでも、十分に敬称に値するんだ。覚えていた方がいいよ。それは置いておいて、実は、君に忠告しようと思って現れたんだ。君は、昨日の晩、ジュースを飲み過ぎただろう。オレンジジュースをコップに何杯も。おかげで、おしっここの量が増えたと、糖分も取り過ぎだ。何とか、朝まで持ちこたえたけれど、本当だったら、ベッドの中が、最初は生温たく、時間が経つにつれて冷いプールになっていたところだよ」

寝小便のことをプールとはおおげさだと思ったけれど、ジュースの件は、おしっこ王子の言うとおりの。昨晩は、お父さん、お母さんが残業だったので、近所に住んでいるお母さんの実家、つまり、おじいちゃん、おばあちゃんの家で夕食を食べた、食事の後は、すぐ様、デザートが出てくる。

食事の間は、もっと、ご飯を食べなさいと、うるさいぐらいに注意するのに、もうお腹が一杯だと白いシャツを脱ぎ棄てて、降参の意をあらわにすると、さあ、あなたが好きなシュークリームよ、と、デザートが出てくる。一体、ご飯を食べないといけないのか、デザートを食べないといけないのか、理解に苦しむ。でも、おじいちゃんやおばあちゃん時代の人は、子どもの頃食糧難だったので、食べられるときに食べる、食べなければならぬという習慣が身に付いているのだろう。

とにかく、出された物は全て食べてしまわないといけない。お腹の中のご飯を無理やり隅に追いやり（実は、かなり余裕があるのだが）、大好物のシュークリームを口にほおぼりながら、オレンジジュースも流し込んだ。一杯のつもりが、隣で晩酌しているおじいちゃんにつられて、もう一杯となり、また、もう一杯となった。後で、仕事から帰って来たお父さんとお母さんに、空きパックの証拠を見つけられて、お目玉を食らったんだっけ。

「そうだろ、そうだろ」

おしっこ王子は、胸（そんなものがあるかどうかは知らないけれど）を張って、答えた。「わかったよ、夜寝る前には、ジュースの飲み過ぎには気を付けるよ」

両親に注意されたら反発するけれど、自分のおしっこに言われたら、言い返す気がしない。僕はもう小学六年生。この年齢で寝小便したら、確かに恥ずかしい。穴じゃなくて、ベッドの下に隠れてしまわないといけない。

「わかってくれたらいいよ。それじゃあ、流してもいいよ」

「でも、水を流したら、君は消えてしまうんじゃないかい？」

僕は奇妙に思い尋ねた。

「大丈夫さ。また、いつでも、一日何回でも君に会えるじゃないか。でも、ジュースの飲み過ぎには気をつけてくれよ。牛乳なら何杯でもいいけど」

おしっこ王子はそう言って笑った。

「ハヤテ、早く、降りてらっしゃい。ごはんですよ」

お母さんの声だ。僕は、水が溜まったタンクのレバーを回した。ぐるるるるるる、ぐるるるるるると渦となり、おしっこ王子は回りながら消えていった。

「さよなら、また、会おう！」

おしっこ王子から、別れと再会を期してのあいさつがあった。僕は本当に会えるのかどうか疑問に思いながらも、王子の言葉の勢いに負け、急いで、流れゆく渦に手を振った。

「さよなら、また、会おう！」

二 うんこ大王

階段を降り、リビングに向かうと、テーブルの上には、朝食が三セット並んでいた。食パン、ゆでたまご、サラダ、それにバナナ。食パンにはイチゴのジャム。いつものワンパターンの朝食だ。たまに、ウインナーかハムが付くぐらいのバリエーションだ。僕はごはん食の方が好きなのだけれど、お父さんやお母さんはパン食の方がいいらしい。お父さんは、右手に新聞、左手にコーヒーカップ、口には食パンをほおぼるなど、器用に朝食を摂っている。これで、一輪車に乗れば、サーカスの団員になれるだろう。

「おはよう」

お父さんからのあいさつ。新聞越しに僕の姿が見えるらしい。

「おはよう」

僕も新聞紙に向かって答える。でも、目はテレビ欄だ。二人が両側から同時に新聞を見ているかっこうになる。僕は新聞を持たなくてもいいから、楽ちんだ。夜の七時からは、毎週欠かさず見ているアニメ番組がある。今日は無事放送される。これからは野球のシーズンなので、よく放映が中止になるので困る。でも、お父さんは、野球の方が見たくてしょうがない。同じチャンネルで、二つの番組を二つの画面に分けて放映してくれればいいのにと、いつも思う。今日の夜の番組を確認した後、椅子に座り、朝食を胃袋の中に流し込む。ぐるぐる、ぐるぐる。さっきのおしっこ王子との別れの時と同じ音だ。あっという間に、何も置かれていなかった白い皿に早戻り。だからと言って、お代わりを要求している訳ではない。

「もう食べたの？」

食卓に着こうとしたお母さんからの言葉。

「うん、ごちそうさま」

僕は、急いで、制服に着替え、歯を磨く。学校へ行く準備は整った。後は、友達が来るのを待つだけだ。ソファーに寝転がり、マンガの本を開く。今日は、月曜日。定期購読している週刊マンガの発売の日だ。学校から帰ってきたら、近所のコンビニに走る。連載マンガのストーリーを思い出すため、今のうちから、もう一度先週号に目を通す。抜かりはないぞ。その時、お腹の辺りが何だか重たく感じた。何かが出そうだ。お尻をソファーに押しつけているけれど、それも限界だ。小走りに、一階の便所へ一気に駆け込む。ズボンとパンツをおろし、便器に座る。ひやっとすることなく、ちょっと温かい便器。お尻にやさしく、気持ちいい。間もなく、塊がお尻から噴き出た。快便だ。一日一回、毎朝、出ている。うーんと落ち着いた。お腹も少し引っ込んだ。この歳で、幼年ぶとりだなんて、僕の生き方に反する。ボタンを押して、お尻をシャワーで洗浄。おもむろに立ち上がり、水を流そうとしたら、声がした。

「少しは、あいさつしたらどうだい」

誰の声？外で、お父さんやお母さんが待っているのか？でも、そんな雰囲気はない。

「ここだ、ここだ」

声は便器からする。さっきのおしっこ王子なのか。それにしても、声が低音だ。言葉も威圧的で、ぞんざいだ。

「わしだ、わしだ」

便器の中を覗く。そこには、茶色で、人間の形をした固体が、たまり水の中で立ち上がっていた。さっきは、黄色。今度は、茶色。いつから家のトイレは、いろんな人形が登場するようになったのだろう。人形の出現に驚くよりも、不思議な気分が強かった。

「あなたは、誰ですか？」

君は誰？と言おうとしかけたが、あなたに言い換えた。怒られそうな雰囲気だったからだ。

「わしは、うんこ大王だ」

さっきは、王子、今度は、大王。自分のことを大王と呼ぶなんて可笑しいと思いながら、

「先程、二階のトイレで、おしっこ王子に会いました」

「あいつは、わしの息子だ」

おしっこが息子で、うんこが父親か。じゃあ、お母さんは、誰だろう？ちょっと尋ねてみたい。

「そのおしっこ王子のお父さんである、うんこ大王様が、僕に何の用ですか？」

「わしとお前の仲だ。様はつけなくていい。王様だけ敬称となるんだ。覚えておいた方がいいぞ。それに、用があるから呼んだんだ。お前は、わしの顔を見ることなく、わしを流そうとした。けしからん奴だ」

言われてしまえば、そのとおりだ。でも、まじまじと自分のうんこを見る人なんて、あまりいない。ほとんどは、いやな物、汚い物としてすぐに流してしまう。じっくりと直視するのは、年に一回。学校の検便検査で、採取するときぐらいだ。それでも、早く、うんことさよならしたくて、さっさと棒を突き刺し、二、三回ぐるりと回して、すぐに、容器の中にしまい込む。もちろん、臭いなんて嗅がない。息を止めて、瞬間勝負だ。そのことを話すと、

「何を言うか。わしは、さっきまで、おまえのお腹にいたんだぞ。お前が、昨日、何を食べたか全てわかっている。特に、昨晚の夕食の際、トマトとブロッコリーを一切れずつ残しただろう。おかげで、わしの体を見ろ。粘って、粘って、しようがない」

うんこ大王は、手や足（うんこにそんなものがあったなんて不思議だが）を持ち上げようとしたが、なかなか動かない。

「ちゃんと、食物繊維を摂らないとこうなるんだ。ひどい時には固まってしまい、お前のお腹の中から出られなくなって、お腹を突き破ることになるぞ」

それは困る。いつもお腹がパンパンじゃ、体が動かない。それに、再び、繰り返すが、お腹ぽっこりの幼年ぶとりだなんて言われるのは嫌だ。まして、男の子がうんこを産んだなんて聞いたことがない。エイリアンじゃあるまいし、うんこにおなかを突き破られたら、僕の一生が、僕の家族が不名誉でべたべたになってしまう。

「わかったよ。ちゃんと、野菜も何もかも、出された物は残らず食べるよ」

「わかったんならいい。そのためにも、わしの様子がどうなのか、毎日、あいさつするんだぞ」

僕は大きく頷いた。

「それじゃあ、流してくれ」

僕は、大王の言うままに、トイレの水洗のレバーを回した。くるくると渦を描き、大王は流れて行った。

「また、会おう。遅くても、また、明日な」

「さようなら。ありがとうございました」

僕は、思わず、便器に向かってお辞儀をしてしまった。

「いやいや礼などいらぬ。またな」

大王に別れを告げ、僕はトイレから出てきた。入れ替わりに、お父さんがトイレに入ろうとした。

「お父さんは、うんこ大王とおしっこ王子を知っている？」

「なんだ、それ？新しいマンガの主人公か？お父さんが小学生の頃、トイレット博士というギャグ漫画があったな。お父さんのお母さん、ハヤテのおばあちゃんからは下品な漫画だと言われていたけれど、お父さんは大好きだったな。それ以来、うんことおしっこを身近に感じているし、毎日、お世話になっているぞ」

「そうなんだ」

玄関のチャイムが鳴った。クラスメイトの義之君だ。

「それじゃあ、行ってきます」

「ああ、行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい」

トイレからはこもった低い声が、リビングルームからは甲高く、はっきりとした声がする。まるで、うんこ大王とおしっこ王子からのあいさつように聞こえた。僕は、すっきりした顔で、学校に向かった。

三 お腹工場

午前中の授業が終わり、僕のお腹がぐうと鳴った。偶然にも、授業の終了のベルに合わせて音がしたので、他のクラスメイトには気がつかれなかった。ただし、隣の席の孝君に聞こえたみたいだ。横腹を指で突かれたからだ。

「さあ、昼食の準備ですよ」

先生の声で、みんなが椅子から一斉に立ち上がり、エプロンを付け動き出した。

「大王、お米が運ばれてきました。でも、お米の形のままです」

「いつもこうだ。もう少し、歯で噛みつぶしてもらわないと、消化に時間がかかってしょうがない。それに、栄養分だって吸収しにくい。折りを見て、歯には、よく咀嚼するように、わしから注意しておこう。とりあえず、目の前の課題を解決しないといけないな。すぐに、その流線型をべとべとにすりつぶしてしまえ。えっ、既に、ごはんがべとべとだと？」

」

「黄色いじゃがいものかけらも転がっています。その傍に、同じく黄色みを帯びた赤いにんじんがひっついていました」

」

「これらの状況から判断すると、今日の給食はカレーライスか。わしの大好物じゃ。豚肉はないか」

「ばらばらになっていますが、筋を発見しました」

「よし、ごころう。皆の者、ひとつぶの炭水化物も、タンパク質も、ビタミン類も見逃すなよ。見つけ次第、粉々にして、全て吸収してしまうんだ」

「おー、大王」

家来たちは、かなづちやカンナ、ツルハシやスコップなど、大工道具や建設用具で、食べ物を細かく砕いたり、すりつぶしたりした後、栄養素などの必要な物と、残りかすなどの不必要な物とに分離すると、タンクの中に放り込んだ。

今日の給食は、カレーライス。僕の大好物だ。家でも、よくお母さんが作ってくれるけれど、学校で、友達と一緒に食べるカレーライスも、また、一味違って美味しい。特に美味しいのは、キャンプの時の飯合炊飯だ。食事は、食べ物の味だけでなく、雰囲気も大事なんだ。もちろん、これは、お母さんが大好きなテレビの旅行番組からの受け売りだ。さあ、最後の一口だ。僕は、スプーンを口の中に咥え、両唇でサンドした。口の中から出てきたスプーンは、銀色に光っていた。僕の満足そうな顔が、スプーンの鏡にひときわ拡大して映っている。

大王と呼ばれている茶色の男(?)は、胸を張り、腰に手を当て、周りの自分と同じ姿形で、ひと回り小さい者たちに、指揮・命令していた。

「王子、そちらの様子はどうか？」

大王は、ふと反対側が気になったのか、振り返った。

そこには、黄色で、同じく人間の形をしているが、体が液体の少年がいた。

「こちらも、順調に進んでいます」

周りには、王子と同じ形をした家来たちが、ホース持ち、流れついた食べ物から水分を吸収している。

「よし、ごころう。この十五分間勝負だ。作業が終われば、僕たちも昼食だ。みんな、頑張ろう」

「おー」

液体の家来たちが、声を合わせ、ホースを頭上に高く掲げた。

給食の残りは、後、牛乳ひとビンだけ。みんなは、カレーライスを食べながら、牛乳を飲んでいる。だけど、それでは、口の中で、カレーライスと牛乳が混じり合ってしまう、それぞれの本来の味がわからなくなってしまう。だから、僕は

、いつも主食を食べ終えた後、牛乳を一気飲みしている。

「辛くないのかい？ハヤテ君は大人だな。僕はいつも交代、交代で、食べたり飲んだりだよ」

と、友人の中西君から感心される。僕は、それほどでもないよ、と胸を張る。確かに、それほど大したことではない。

さあ、ラストを締めくくる牛乳だ。椅子から立ち上がる。牛乳の蓋を開け、腰に手を当て、足は肩幅の広さに開き、背筋を伸ばし、不動の態勢で、一気に飲みほそうとした。

「待ってくれよ、ハヤテ君」

隣の孝君が続いて立ち上がった。僕の周りの村上君も、横井君もすくっと立った。その他のクラスメイトも続いた。教室を見回すと、今日の牛乳一気飲み参加者は十五人。毎日、一人ずつ、参加者が増えている。

「いくぞ。それ！」

僕の掛け声とともに、十五本の牛乳が、お腹めがけて、一気に流し込まれていく。喉仏が急いで上がったり、下がったりするとともに、白い牛乳瓶の向こう側に、教室の黒板や花瓶などが現れて。ガラス瓶に、牛乳を飲んでいる僕たちの姿が映る。一人、二人、三人、四人、五人。それ以上は映らない。さあ、今日は、誰が一番に、牛乳を飲みきるかな。クラスの牛乳早飲みギネスに挑戦だ。

働いている者たちの掛け声が終わるやいなや、大量の水分が流れてきた。牛乳の洪水だ。警報まではいかないけれど、注意報に値する。

「みんな、流されるな。僕たちの成長のためのカルシウムだ。一滴残らず、吸収してしまおう」

王子は体が小さく、まだ少年だが、部下の先頭に立って、ホースを構えている。

「みんな、王子に続け」

王子のすぐ後ろにいる筆頭家来が声を張り上げた。だが、以外に、牛乳の波は激しい。一気飲みで勢いがついているためか、足元を掬われ、ホースを持ったまま流される家来たちもいる。液体だけに、踏ん張りが効かないのだ。おしっこ軍団の危機だ。

「よし、わたちも応援するぞ」

大王が王子の前に立った。

「皆ども、手をつないで、壁を作れ。牛乳の洪水に立ち向かい、勢いを止めるんだ」

「おー」

さっきよりも勇ましい声がする。うんこ軍団の家来たちが、壁を作り、牛乳の流れを防ぐ。大波を打っていた牛乳は、壁に当たり、跳ねかえった。

「いまのうちだ。みんな、吸収するんだ」

王子の檄が飛ぶ。おしっこ王子の家来たちが、ホースを構え、牛乳をどくどく、どくどくと吸いこんでいく。遥か彼方の壁に流されていた家来たちも、牛乳の海の中を泳ぎながら、元の位置に辿り着く。軍団の大勢は整った。あんなに大量にあった牛乳も、あっと言う間に吸収できた。足元には、牛乳溜まりもない。団結の力だ。

「みんな、よくやった」

「ありがとう」

大王も王子も、うんこ軍団の家来たちも、おしっこ軍団の家来たちも、体中白くさらされながらも、顔は達成感に満ち溢れていた。緊張した顔が笑顔に変わった。

「よし、これが、多分最後の給食だろう。まだ、栄養分を吸収しきれしていない食物が残っているはずだ。見落とすな。これが終われば、休憩にはいろう。後、もう少しだ。頑張ろう」

「おー」

両軍団の家来たちは、最初の持ち場に戻った。しばらくすると

「大王、王子。すべての食べ物を粉碎し、栄養分を吸収しました。作業は完了です」

二人の前に、両軍団の筆頭家来から報告があった。

「お疲れさま。当分の間、休憩だ。さあ、この栄養素を体全体に送るぞ」

「はい、了解しました」

別の家来が、栄養素が蓄えられたタンクのポンプを押し始めた。血液を通じ、体中に行き渡る炭水化物やタンパク質にビタミン類。「体よ、このエネルギーを有効に活用してくれ」

大王や王子、家来たちは、願いを込めながら、最後までこの様子を満足そうに見つめていた。

楽しい給食も、休憩の中の遊びの時間も終わり、午後の授業が始まった。さっきは、あんなに膨れていたお腹も、今は、元通りだ。先生が教壇の前に立って、黒板に字を書いている。最初は、字がはっきりとしていたのに、次第に、象や亀に見えてくる。目がぼやけてきたのか。おかげで、漢字やひらがなが物の形から生まれたことを思い出した。目だけではない。先生の声もだんだんと小さくなっていく。僕が、この教室から離れて行ってしまっている。僕の耳が年老いたのだろうか。給食を食べた後で、エネルギー充填百パーセント、体に力が漲ってくるはずなのに、何故だか、眠い。まだ、各細胞に栄養が行き渡っていなせいだろうか。少し休めば、回復するだろう。変に納得して、僕は机に突っ伏した。

「大王。わが体の主はどうでしょうか。ちゃんと、勉強しているでしょうか？」

「もちろんだ、王子。そのためにこそ、わたたち一族は、こうして、休む間もなく、二十四時間体制で、頑張っているんだ。わたたちの働きは、体の主も認識しているはずだ」

「でも、今朝の出来事のように、僕たちにあいさつなんかしてくれませんか」

「あたりまえだと思っているんだ。だからこそ、今朝は、意見してやったんだ。これからも、どしどし、発言するぞ。

王子、お前も頼む。それが、主のため、わたたちのためになることなんだ」

「はい、わかりました。大王」

四 おやつ時間

僕は、授業が終わると、自宅に帰った。不思議なことに、あんなに抵抗できなかった眠気はふっとび、今は、頭は冴え、体は動きたくてうずうずしている。玄関前の植栽の中にぶら下げているカギを取り出すと、家の中に入った。靴を脱ぐと、ボンと玄関の扉に靴が当たる音がした。その音に気づいて、逆ハの字に散らばった運動靴を、いつでも履きやすいように平行に並べた。その後、リビングルームに入る。

部屋の中には、誰もいない。でも、出迎えはある。テーブルの上のじゃがいものスナック菓子だ。ランドセルと制服のまま、手を伸ばす。ぐうとお腹が鳴る。袋を破れと命令している。僕の耳には、いつも同じように聞こえるが、本当は、その都度、違った問い掛けなんだろう。ぐうにも、いろんなぐうがあるんだ。僕は袋を手にとった。だが、手を洗ってないこと、うがいをしていないことに気づく。

また、ぐうと鳴る。さっさとしろということか。お腹の命令には素直に従おう。こういうときは、利害が一致している。全てが整い、やっとおやつ時間。麦茶を冷蔵庫から取り出し、ガラスコップに注ぐ。コップは、僕の顔を映しながら、見る見るうちに透明なうす茶色に変わる。見ているだけで、涼しくなる。やっぱり麦茶が最高だ。でも、コーラもオレンジジュースもグレープジュースも大好きだ。テーブルの上に置きっぱなしにしてあった、まだ読み切れていない大好きなコミックマンガを片手に、ソファに寝転びながら、スナック菓子を食べる。

お父さんやお母さんに行儀が悪いと叱られるけれど、こればかりはやめられない。お父さんだって、仕事から帰ってくると、缶ビールを片手に、ピーナツを齧りながら、新聞をテーブルの上に広げ、テレビのニュースを見ている。器用三昧、四昧だ。これこそ、大人の特権。僕だって、将来、大人になるための修行を今からしているだけのことだ。鉄は早いうちに打てと言うじゃないか。学校で教わることだけが勉強ではない。家庭での生活も含めて、生きることすべてが勉強なんだ。僕は、いつも自分にそう言い聞かせている。

「大王、王子。今、先ほど、口から伝達がありました。食べ物が入ってくるそうです」

見張りに立っていた家来からの報告だ。

「ううううん」

「ししししん」

まどろみの時間から目覚めたうんこ大王とおしっこ王子、その家来たち。

「皆ども、起きろ、起きろ。昼寝の時間は終わりだ。仕事だ、仕事だ。三時のおやつだ。おやつだから、量はたいしたことではないはずだ。わたしたちも、眠りから覚め、ちょうど小腹が空いたところだ。さあ、働くぞ、働くぞ」

「おー」

敵は、ポテトチップスに麦茶。固体班とリキッド班に分かれ、てきぱきと栄養素を選別し、吸収していく。みんなでかかれば、仕事は早い。お腹工場はフル稼働。

「追加はないか。これだけか」

「もう、ありません」

「よし、これだけなら、あつと言う間だ。もうすぐしたら、夕食だ。もっと大量の食べ物が運ばれてくるぞ。栄養満点のパレードに出会えるぞ。それまでに、さっさと仕事を終わらせてしまおう」

「おうー」

固体班は、かなづちとシャベル。リキッド班は、ホースを持ち、次々とポテトチップスや麦茶の栄養素を吸収し、老廃物を放り捨てていった。

「いけない。もう、時間だ」

時計を見ると午後五時に十分前。今日は、英語の塾がある。鞆をかかえ、玄関を出る。自転車に飛び乗り、目的地に向かう。先生は、アメリカ人。矢継ぎ早に、英語で質問が飛んでくる。刀でなぎ払うように、解答しないといけない。頭

の中をフル稼働するためには、エネルギーが百パーセント必要だ。僕は、お腹を叩いて、先ほど食べたスナック菓子と麦茶の栄養素を頭によろしくと願います。その思いは自転車のペダルにまで届いたのか、カランカランと勢いよく回った。

五 夕食

「ハヤテ、夕食ですよ。その前に、お風呂に入りなさい」

「ちょっと待って。このテレビが終わるまで」

塾から帰って来た僕は、今、大好きなアニメ番組を見ている。さっきまで勉強していたから、今度は、頭に休息の時間を与えてあげないといけないからだ。

「あなたは、いつもそうなんだから」

お母さんにはお母さんの時間配分があるように、僕には僕の時間進行がある。あと五分で全てが解決する。お母さんのお小言を聞き流しながら、本題のテレビに集中する。終わりの主題歌が流れた。

さあ、お風呂だ。シャツやパンツを脱ぎ、洗濯機の中に放り込む。同じように、体も湯船の中に放り込む。体を洗うとき、お腹を触る。いつも不思議なことだが、どうしてお腹は減るんだろう。毎日、三食のほかに、三時のおやつ、食後のデザート、計五食以上も食べるのに、いつも決まった時間に元通りに戻る。

でも、おかげで、こうして、勉強や遊びのエネルギーをもらっているんだ。よしよし、今、満腹にさせてやるぞ。僕は、少し、ぐうと叫びだしたお腹を撫でてやった。

「ふあわああ。仮眠は終わりだ、皆ども。耳からの報告では、お腹の外では、夕食が準備されているそうだ。ほら、がちゃがちゃと食器をテーブルの上に並べる音が聞こえてくるだろう。じゅうじゅうと何かを焼いている音もしているだろう」

「大王。今、鼻からも、いい匂いがしているという連絡が入りました」

「あっ、ここでも匂うぞ。これは、僕の大好きなステーキの匂いだ」

「王子、それはよかったな。それなら、働きがいもあるものだ。わしは、ひと口のビールで十分だが、今は無理だなあ。まあ、主が大人になるまで後十年を待つか。さあ、今日のメインイベントだ。頑張って、栄養素を吸収するぞ。それ、皆ども、持ち場につけ」

「おー」

うんこ軍団とおしっこ軍団の家来たちは、消化道具を体中に装備すると、今日一番の大仕事のため臨戦態勢に入った。

今晚は、僕の大好物のサーロインステーキだ。じゃがいもやにんじん、さやいんげんも添えられている。黒、赤、緑、白の四色だ。彩りもいい。

テーブルの前には、お父さんが既に座っていて、ビールを飲みながら今日のテレビニュースを観ている。お母さんは、最後の総仕上げで、たまごスープをカップに、ごはんをお茶碗によそっている。

さあ、戦闘開始だ。僕は、椅子に座ると、フォークとナイフを持ち、分厚い肉の塊に挑戦する。お腹も、空き空きの状態で、好き好きの御馳走を待っている。両者の意見は一致した。肉を左の端から切ると、口にほうばる、ほうばる。美味しい、美味しい。肉とソースのうまみが絡み合って、唾液がとめどもなく溢れる。

このまま胃の中に押し流すのはもったいない。口の中で何度も何度も噛みしめる。口の中に肉汁が溢れる、溢れる。この一回、この一回が、僕の体を大きくするなんて不思議だ。美味しい成長。こんな楽しいことはやめられない。

二十四時間、三百六十五日、食事を食べ続けたい。でも、そうすれば、口はいいれどい、消化する胃や小腸、大腸などが、たまには休みをくれなんて、ストを起こすかもしれない。その証拠に、食べすぎた後は、必ず、お腹が痛くなる。少しは気をつけなさいというメッセージなんだろう。お腹が文句を言い出したらそれこそ、やかましくていけない。ひょっとしたら、僕が知らない間に、胃や小腸などが、僕の食生活について、会議をしているかもしれない。やっぱり、食べすぎや偏食には気をつけよう。僕は、ゆっくりとお腹を撫で回す。お腹さん、お腹さん、これからもよろしく。

「大王。今晚は、間違いなくステーキです。今、唾液からの連絡が入りました。でも、唾液もステーキが好物なので、

なかなかこちらに回ってきません」

「まあ、慌てるな。一旦、口の中に入った以上、吐きだされることはないだろう。よし、わしも好きな肉だ。みんな、心してかかれ」

「大王。メインディッシュが肉なら、スープも出ますよね」

「もちろんだ、王子。お前の方の仕事も抜かりなく、よろしく頼むぞ」

「はい、わかりました」

お腹の兵士たちも、フォークとナイフを片方ずつ持ち、いつでもステーキが流れてくるのを待っている。肉やじゃがいも、にんじんなど、歯で小さく砕かれた食べ物が流れてきたら、より一層、細かくして、栄養分と老廃物とに分けるのだ。二十四時間、三百六十五日、いつでも対応可能なように、休みなく見張りを立てている。こんなこと、主は知っているのだろうか。

「ふう、満腹だ。もう食べられない」

僕は、先ほどまで引っ込んでいたが、今は軽く小山状態のお腹を撫でた。皿は洗わなくてもいいぐらいに白く光っている。

「ごちそうさまでした」

軽く手を合わせ、あいさつをすると、マンガの本を持ってソファーに寝転んだ。

「すぐに、横になると牛になるぞ」

お父さんが横目で僕に注意する。

「大丈夫。僕は丑年生まれだから、生まれた時から牛なんだ」

塾と学校の宿題をしなければならぬけれど、しばらくは、休憩タイムだ。今は、お腹の中は、先ほど食べたステーキを消化するため、戦場になっているはずだ。そちらがまずは優先だ。脳とお腹を同時に動かすなんて、そんな器用なことには僕にはできない。でも、ステーキは、本当に、美味しかった。きっと、お腹も十分満足だろう。

六 おなら姉妹

「大王。なんとか、無事に、消化活動は終わりました」

大王の元に、次々と家来たちが、それぞれの持ち場の状況を報告にくる。

「大王、スープも完全に吸収しました」

王子もやってきた。

「皆のども、お疲れさまじゃ。今日、一日、無事にすんだ、本当に、ありがとう。また、明日に備えて、ゆっくりと休んでくれ」

「大王、まだ、今日の仕事は終わっていません。一時間後ぐらいに、デザートタイムがありますよ」

王子がすかさず、進言した。

「そうだったな、王子。でも、今日は、二杯もごはんをお代わりしたし、ステーキのボリュームもすごかったぞ。明日の朝まで、主が何かを食べることはないだろう」

「ですが、主は、お菓子は別腹だと、よく言っていると、耳から聞いています。万が一に備えて、私が見張りをしておきます」

「そうじゃなあ、王子。腹はひとつしかないのに、ふたつあるなんて、どういう発想なのか、わしらにはわからん。別の腹を体の外側にでもぶら下げているつもりなのか。まあ、それはいい。それじゃあ、王子。見張りを頼む。それ以外の者は、持ち場は離れずに、休憩タイムだ」

家来たちは、座って談笑したり、眼をつぶり仮眠したりするなど、様々だ。本格的な熟睡には、まだ、少し早い。

「何もなければ、いいけれど」

おしっこ王子は、食べ物が流れてくる遠いトンネルの先を眺めた。

「あれ、おかしいぞ」

王子は、工場内が急に膨張し始めたことに気がついた。お腹が膨らんでいるのだ。

「体中が壁に押し付けられる」

他の家来たちも異常に気が付き立ち上がった。家来たちの前には、巨大なバルーンの形をした怪物が現れた。

「おーほっほほほ」

「ひーほっほほほ」

怪物は二体だ。異変に気がついた大王も駆けつけてきた。

「おまえたちは、おなら姉妹だな。何故、ここにいる。しまった。消化活動の際、十分にガス抜きができなかったせいだな。くそっ」

大王は、腕組みをしたまま、彼女たちを睨みつけた。体をぷりぷり、ぷりぷりに膨らませたおなら姉妹は、にやにや、にやにや笑ったまま、大王たちを見下している。

「ここから出ていけ」

うんこ大王の家来たちが、シャベルやのこぎりを持ったまま、姉妹に飛びかかった。だが、相手は気体。体を通り過ぎるだけだ。何のダメージも与えられない。

「あたしたち相手に、そんなことしても無駄よ。おーほっほほ。食後の運動のつもりなの。せいぜい、走り回るがいわ。おーほっほほ」

姉が、お腹をより一層膨らませて笑う。風船爆弾の一步手前だ。

「姉さん、あたしに任せて。こいつらなんて、ひとひねりよ。ひーほっほほほ」

妹が、突撃してきた家来たちをガスで取り囲んだ。

「くさい、くさい」

一団は、あまりの臭さに気を失い、妹の足元に倒れてしまった。その様子を見ていた他の家来たちは、姉妹を恐れ、二歩、三歩と後ずさりする。

「どう、あたしたちおなら姉妹の恐ろしさを知った。おーほっほっほ。」

「このまま、この工場をガスで爆発させてあげるわ。ひーほっほっほ」

そんなことされたら、自分たちだけが吹っ飛ぶのではなく、主のお腹も裂けてしまう。

「そんなことはさせないぞ」

おしっこ王子が、いつもは液体の栄養素を吸収するホースを取り出した。

「お前たちを工場だけでなく、体の外に追い出してやる。みんな続け」

「おー」

おしっこ軍団が、各自のホースでおなら姉妹を吸収しようとした。

「おーほっほっほ。そんなもので何ができると言うの。あたしたちの攻撃を受けてみなさい」

姉妹が、おしっこ王子の家来を取り囲んだ。くさい、くさい攻撃だ。だが、家来たちは、液体となって、ガスの包囲網から抜け出し、相手の後ろに回る。そして、すぐさまホースを手に取り、姉妹を吸収しようとする。

「ひーほっほっほほ。なかなかやるわね」

もう一度、姉妹は家来たちガスで包もうとした。再び、液体となって逃れ、反対に吸収しようとする家来たち。その攻防が何度か繰り返される。

「さっさと降参しなさい」

「子どもの鬼ごっこはもうお終いよ」

姉妹の口調は強気だが、さっきまでの、ほっほっほの高らかな笑い声がない。

「敵は、疲れてきているぞ。いまだ」

おなら姉妹の妹の後ろに回った家来の一人が、ホースのボタンを押した。

「ブウォウオーン、ブウォウオーン」

最大限の出力を上げたホースは、唸り声をあげて、目の前の気体を吸い込み始めた。

「ひいひい。お、おねえさま。た、助けて」

妹が、お尻から、体、頭と順々に吸い込まれていく。

「待っていて、可愛い妹よ。今すぐに助けてあげるわ」

姉は、怒りに満ちた形相で、妹を吸い込んだ家来を毒ガスで攻撃しようとした。だが、体が前に進まない。後ろを振り向く。そこには、おしっこ王子の姿が。王子は、自分のホースで姉のお尻を吸いこもうとしていた。

「な、な、何をやるの。やめなさい」

「やめるのは、お前たちの方だ」

「おねえさま、ひゃーあああん」

「いもうとよ、ひゃーあああん」

妹同様、姉もそのまま吸い込まれて、工場の外に、老廃物として追い出された。

「よくやったぞ。王子」

うんこ大王は、おしっこ王子を抱きしめる。

「いいえ、みんなのおかげです」

「えいえい、おー」

いつもよりも、「おー」に「えいえい」が付き、力強く勝鬨を上げる家来たちだった。

「なんだか、お腹が張って来たぞ。やっぱり、食べすぎかな」

僕は、机に向い、明日の学校の宿題をしていたが、慌ててトイレに駆け込んだ。ズボンを下ろす間もなく、お尻からは、「ぶう」という音がした。続いて、再び、「ぶう」。計二回。おならだ。おならの二弾発射だ。自分のおならでも、やっぱり臭い。急いで、トイレの窓を開ける。

「ふう」

これは、僕の溜息。おならじゃない。お腹を撫でる。先ほどまでの突っ張った感じはしない。

「さあ、勉強、勉強」

僕は、安心して、机に向かった。

七 デザートの時間

しばらくすると、

「ハヤテ、ドーナツがあるぞ」

お父さんの声だ。お父さんは、いつも飲み会の時に、お土産を買ってくる。そのうち、九十パーセントの確率でドーナツだ。今日は、飲み会じゃない。お父さんは早くから帰ってきていた。どうした風の吹きまわしか。でも、僕には、そんなことは関係ない。大好物のドーナツが食べられれば、それでいい。

「すぐ、下に降りるよ」

済ませた宿題のプリントや明日の授業の教科書などをカバンに詰め込んだ。今から、夜の休憩タイムだ。本棚から、これまた大好きなマンガのコミックを一冊取り出すと、リビングに向かった。部屋には、コーヒーの匂いが漂っている。皿の上には、黒やピンク、黄色い砂糖の粒をまぶした色とりどりのドーナツが並べられていた。その傍には、オレンジジュース。テーブルの上は、まるで虹の輪が集合したみたいだ。

「いただきますあす」

ドーナツをひとつ掴むと、ソファーに座る。本当は、寝転がりたいのだけれど、さっき行儀が悪いと注意されたからやめた。ひと口、ほうばる。美味しい。でも、少し、口の中がぱさぱさする。ソファーの傍に置いたジュースに手を伸ばす。甘味に、甘味が乗っかる。甘味の二重の塔。あまあまだ。幸せも二倍、二倍。これで、一日の頭や体の疲れもふつとぶ。僕よ、僕の頭よ、僕の体よ、堪能してくれ！けれど、ひと口飲んだところで、今朝のおしっこ王子の言葉を思い出した。「夜、遅くに、オレンジジュースを飲みすぎちゃいけないよ」だったっけ。おしっこ王子の言葉は、僕の言葉だ。オレンジジュースから、牛乳に変え、最後の一杯は、麦茶を飲んだ。でも、やっぱり、三杯は空にした。まあ、いいか。明日の朝、おしっこ王子に謝ろう。

「やっぱりきたか」

「待ってました」

「準備万端です」

「すぐに消化活動に取り掛かります」

固体と液体の家来たちは、先ほどのおなら姉妹との壮絶な戦いの疲れも何ともせず、早速、消化活動に備え、道具を構え始めた。時間はそんなにかからず、栄養素と老廃物と分け、栄養素を吸収し、老廃物は廃棄口に放り込んだ。老廃物のタンクの蓋をゆっくりと持ち上げ、中を確認する。おなら姉妹がもどってきやしないかと少し心配だったからだ。でも、中は空洞だ。持ち場の担当者は、安心して、ドーナツのかすを放り込んだ。また、オレンジジュースと牛乳と麦茶から、栄養分を吸収し、余分な水分を取り除いた。

「これで、ようやく一日が終わったな」

大王は、一日中、立ちっぱなしだったことを思い出した。

「お疲れさま」

「お疲れさま」

家来たちは、お互いに、今日一日の健闘を讃え合った。

「よし、今日は、無事業務終了だ。みんな、ゆっくりと休んでくれ。ただし、主人が、喉が乾いて、水を飲むかもしれないから、リキッド班を中心に、夜勤体制を組んでくれ。よろしく」

「はい、わかりました、大王。私から、リキッド班に指示します」

おしっこ王子は、自分の家来たちを集めると、当番表に基づいて、見張りを立てた。

「また、明日も頑張ろう」

「おー」

残りの家来たちは、それぞれ、自分の寝場所に戻って行った。自分たちと主の明日の成長を夢見て。

「おやすみなさい」

僕は、ドーナツを堪能した後、歯を磨き、お父さんやお母さんに挨拶をすると、ベッドに潜り込んだ。手には、さっきのコミックの本。まだ続きがある。でも、ふとんの中にはいると、目にまぶたのふとんが覆いかぶさってきた。このふとんは、少し重すぎる。普通のふとんじゃない。めくり上げようにも、ひっついて離れない。もう、駄目だ。まあ、いい。今日は、このへんにしておいてやろう。訳のわからないことを、漫画の本に語り掛ける。まくらに頭を乗せたまま、足を延ばす。体を起こし、かかとのところの敷布団のシーツに鉛筆でうっすらと線を引く。昨日と同じ場所だ。でも、一年前よりも、五センチは伸びている。成長している証拠だ。明日も、もっと食べて、もっと飲んで、大きくなるぞ。そのためにも、お腹さん、よろしく。僕は、お腹を撫でながら、眠りについた。

八 翌朝

朝、僕は目覚めると、急いで、トイレに駆け込んだ。おしっこがしたくてたまらなかったからだ。昨晚のオレンジジュースと牛乳と麦茶のせいかな。パジャマのズボンとパンツをすばやく同時に下ろし、おちんちんを取り出す。もう既に、おちんちんの先が、張り裂けんばかりに膨らんでいる。爆発寸前だ。

僕の号令よりも先に、おしっこが発射。後から、ふうと、僕の安堵の声が続く。便器の中を黄色い液体が跳ねまわっている。でも、オレンジジュースの色ではない、ちゃんと、僕のために、栄養分を吸収してくれている。僕は、昨日の朝のことを思い出し、

「おしっこ王子、おはよう」

と、声を掛けた。先手必勝だ。言われる前にやれ。同じことは繰り返さない。だけど、水洗トイレにたまったおしっこからは何の返事もなかった。

しばらく様子を窺う。やはり、返事はない。ひょっとしたら、昨日は寝ぼけていたのかな。まあいいか。水洗レバーを回す。水が流れるジャーという音に混じって、「今日も元気で、頑張ろう」、と声が聞こえたような気がした。僕は、慌てて、

「うんこ大王にもよろしく」

と、言い掛けながら、そうだ、今朝、うんこはまだ出していないことに気がついた。トイレの外では、お父さんが

「ハヤテ、まだか。早くしろよ」

と、立て続けにドアをノックしている。